

# 「もとはこちら」のお話し

№51 今月のテーマ

親子という縁



自分から自分で自分を  
説教出来るようになれば  
しめたもの

(平井謙次作 日めくりカレンダーより)

落ち着いた雰囲気のカフェでコーヒーを飲んでいた時、聞くとともになしに聞こえてきた会話に驚いた事があります。

中年らしい男性が一生懸命に、ある国の実情について話をしていました。

彼はその国の政治家たちの名前を挙げながら、その国は今こういう状況にあり、それは遠い過去からのこういう事が原因しているのだという事。そして早急にその問題を解決しなければ、近い将来その国は政情不安に陥るだろう事。そうなれば国民は大変な状況に置かれる事になるだろうし、近隣の国々にも影響は及ぶだろう事。そしてやがてはこの日本にも、少なからぬ影響があるだろうという様な話でした。

今でこそ、民主化を求める中東の人達の、大きなうねりのニュースが世界中を駆け巡らない日はありませんが、私がその話を聞いたのは、今からもう何年も前の事です。ですからそういう話が、一般人である私達の耳に届く事は殆どなかった頃です。

しかしその人は、新聞でもテレビでもまだ報じておらず、殆どの人が知らないそういう最新事情を、経済や歴史の話を交えながら、非常に分かりやすく熱心に話しているのです。

こんな街中の喫茶店でそういう話を聞くこと自体が、私には驚きだったのですが、それ以上にもっと驚いたのは、その話をしている相手というのが、まだ子供の面影を残したような、若い中学生くらいの男の子だったという事です。

察するところ、帰国したばかりの大使か何かの父親が、いま自分が観てきたばかりのその国の実情を、我が子に向かって話し聞かせているようでした。

聞いている子供のほうも、本当に礼儀正しい態度で、熱心に父親の話に耳を傾けておりました。

同じ喫茶店の中で殆どの人が、身近な日常的な話に打ち興じているその中で、遠い国の歴史や経済、政治の話を熱心に語る親子の姿からは、何か非常に際立った印象を受けました。しかし彼ら親子にとっては、それはごく当たり前の日常会話のようでもありました。

## 様々な親子の関係

この親子とは違う、また別の親子の話ですが、ある時その家の中学生の息子が警察に捕まったという話を聞きました。身の回りのほんのちょっとした物を万引きしたとの事でしたが、ようやく戻され帰ってきたその息子を、「なぜ、警察に捕まるよ

北原ゆり筆

うな事をやったのか」と、その父親が激しく叱りつけたというのです。「万引きするにしても、店のものに見つかるような、そんなへまな事をするな。会社や親戚、それに近所に知られたら、俺の立場がない」と怒ったという、嘘のような本当の話です。

その父親は社会的地位もあり、また決して経済的に困窮しているような家庭ではありません。

親子関係といえ、他人の私どもから見ても、本当に素晴らしい子供だと思ふような我が子を指して、謙遜ではなく心底、「アイツは本当にデキの悪い、駄目なヤツだ」といって我が子をさげすんでいるような父親もいれば、取り立ててどうという事のないように見えるわが子の事を、何かに付けて自慢し、褒めちぎる父親を私は知っています。

この父親、誰に対してもその人の長所を見つけるのがうまいのかといえ、決してそうでもなく、赤の他人に対しては、「あれっ?」と思うほど、結構厳しい目で相手を批判的に見る傾向があるのです。一般的に言つて、父親と成長した息子というのは、男同士という事もあるが、どこことなくライバル同士のような関係になる事が多いその中で、彼のように大きくなった息子にベタベタと甘い父親というのも珍しく、ほほえましく思ひながらも、何か少しばかり馴染まない感じも受けます。

## 親子関係は、みんな違う

人間は一人ひとり個性があつて、自分と同じ人が一人としていない様に、親子関係というのも、百組あれば百組、千組あれば千組、夫々にみんな違ってきます。

言わば、自分達親子と全く同じ親子関係をもつ親子、などというもの、世界中どこを探してもないという事です。子供が何人もある親でも、親とその子との関係は、他の子供との関係とはまた違います。

初めての子か末っ子か、また男の子か女の子か、早くに出来た子



か、年老いてからできた子とかで、親子関係は微妙に違ってきます。

自分が親の何番目の子として生まれるかという様な事も、自分達のその後の親子関係を大きく左右しますが、まず何よりも肝心な事は、数ある人の中から、自分がどういふ人を自分の親に持つかという事です。

しかし誰も意識して自分で自分の親を選ぶ事はできません。生まれてみれば、たまたまこの人が自分の親であつたというだけの事です。

その為でしょうか、実際に自分の目の前にいるこの人が、自分にとっては最高の親だと心の底から思っている様な人は、よほど出来のよい人であつて、大部分の人は親に対して大なり小なりの不満を持ち、自分自身も素晴らしい親の元に生まれてきたかと思つてゐる事が多いようです。

言葉で言へば、子供である自分の事を深く理解し、子供の人格を尊重し、自分の所有物としてではなく一人の人間として子供を扱い、親自身は人情味も有り、一人の人間として尊敬できる人、要は人間としてあらゆる点で完成されたデキのよい、そういう人を親に持ちたかつたという事です。

しかし現実には目を向ければ、運悪くどうか何と云うか、理想からは程遠い人が自分の親であつたりするわけです。

ですから、箸にも棒にも掛からないようなデキの悪い人を親に持つか、理想的な人を親に持つかという事は、自分が生まれる以前の事であつて、生まれてしまつてからではもう遅い、というのが現実です。

先の例でいへば、高い見識を持ち、世界や人類のあり方や進み方という様な事に関心を持ち、幼い息子に対しても真剣にそういう話を言つて聞かせ、子ども自身にも考える機会を与えるような人を自分の親に持つか、万引きした息子をつかまえて、その泥棒の仕方が悪いと言つて殴り付ける様な人を親に持つかは、自分ではどうにもしようがないという事です。

## 涙のお赤飯

親子といえば、ある講演会でこういう話を聞いた事があります。その人は子供の頃から勉強が大好きで学校の成績も良く、義務教育を終えた後、とても上の学校に行きたかったそうです。

しかし家の実情が分かっているうえに、幼い弟や妹のこともあり、とても自分の気持ちを親に伝える事などはできませんでした。

学校の先生も彼の学習能力を高く評価していて、何とかして進学できるようにと色々手を尽くしてくれたそうですが、結局どうする事もできなかったようです。

それで彼は、学校を卒業したら遠くの町に働きに出ようと、一人ひそかに心に決めたのでした。親に言えば悲しむだろうと思い、親には何も言わずに家出する日を心に決め、そのまま静かに数日間を過ごしました。

そしていよいよ家出決行の日を迎えました。

日もまだ明けやらぬ暗いうちに起きだした彼は、寝静まっている家族を起こさぬようにそっと布団を抜け出しました。そして隠しておいた身の回りの物を入れた包みを持って家を出ようとしたその時、すーっと障子が開いて、母親が現れました。

驚きながらも、手渡された小さな包みを手にすれば、ほのかな温もりが手に伝わってきます。それは何も言わない息子の心の内を察し、しかも息子の様子から家出決行のその日をちゃんと分かっていた母親が、子供の晴れの門出を祝うために、貧しい家計をやりくりしてもち米を買い求め、何日も前からその日のために小豆をゆで、そしてその決行の当日朝早く起きて、そっと作って持たせてくれたお弁当だったのです。

汽車の中で、涙の塩味がする赤飯のおにぎりを頬張りながら、彼は、自分は絶対に成功して偉くなり、親に恩返しができる様な立派な人間になると、心に強く誓ったそうです。

そして人一倍の努力や苦勞の結果その思いは実現し、請われて大勢の人の前で、母の話や人の生き方などについて話をするような、本当に素晴らしい人になったのです。

## 鬼のような母親

この話とは別に、またこういう話もあります。

戦前の事ですが、その人の父親にあたる人は、小学校は四年生までしか行けなかったそうです。しかしものすごい努力家・勉強家であって、結局は国を動かすような要職に就いたそうです。

しかしその父親がある日突然殺されてしまい、やめとなったやはり無学に近い母親が、遺された子供達を、「父親がいらないから、こんな人間になったのだ」等と決して他人に言われないように、そして「どこに出しても恥ずかしいくない、立派な人間に育てあげて見せる」と自分で自分に誓ったそうです。

そして様々な苦勞をものともせず、戦時中でありながら四人の子供を夫々大学にまで行かせ、立派な社会人に育て上げたのでした。

一方子供の方は、自分を可愛がってくれていた父親を突然亡くし、非常に寂しい思いをしているところに、鬼のような厳しい母親を見て、もしかしたらこの母は、自分の本当の親ではないのではないかなと思ったそうです。

それで年の離れた姉に聞くと、「何を言っているの、今は随分優しくなった方よ。昔はもっともつと厳しかった」と笑われたそうです。

そのようにして母親から本当に厳しく仕込まれ育てられた彼女は、今はある大学の理事長になり、自分が母親から教えられたことを、即ち人としての正しい生き方やものの考え方などを、八十歳を越えた今も学生たちに教え続けているという事でした。そして今は、本当に厳しくしつけてくれた鬼の様なその母親の事を、心から感謝をしていると言っておりしました。

## 葬儀の席で号泣

このような感動的な親子の話もあれば、同じ様に沢山の子供を立派に育てた母親でも、また違う道を歩んだ母親もおります。

養護老人ホームで暮らしている彼女は、人をつかまえては繰り返して、繰り返して話すことがあります。自分には三人の子供がいる事。

そしてどの子もみな非常に学校の成績が良かった事。その成績の



お陰で何と三人が三人とも東大に入り、今は立派な職業を持っているという事。上の子は誰もが知っている一流企業の役員にまで上り詰め、年収はどれ位あって生活は豊かであり、よい所から嫁を貰ったので家庭もしっかりしているという事。

そして、これまた成績の良い孫たちは、人も羨む進学校に通っており、また次男は医者になって先生、先生と呼ばれ、忙しく働いている事。そして末っ子の娘も仕事と家庭に恵まれ、自分が生んだ子供達は、どの子も皆とても幸せなのだという話です。

彼女の息子自慢、娘自慢そして孫自慢は、放っておけば何時間でも続くそうです。しかし仕事に忙しいスタッフたちは、彼女の話に付き合っただけでもおれず、施設内の友達も段々と寄り付かなくなり、そして何より肝心の、その自慢の子供や孫たちは、年に一度も訪ねて来る事はないという話でした。電話も手紙も来ず、他の入所者が、訪ねてきた家族や知人とお喋りを楽しんでいる間も、彼女はいつも一人、窓の外を見ているそうです。

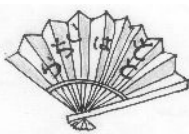
また別の人の話ですが、自分の実の母親の葬儀の時に、人目も憚らず号泣したという中年女性がいました。

親が死んでしまった事が辛くて哀しいのではなく、号泣したその真相は、自分は幼い頃より他の兄弟姉妹と違う、差別的な扱いをされ、自分を嫌い邪険に扱った母親への長年の恨み・つらみが、葬儀の席で一気に噴出したという事でした。

また別の人は、自分が可愛がっていたペットが死んだ時、その悲しみを表現して、「親が死んだ時よりも、何倍も悲しい」と言いました。その人が自分の親とどのような関係にあったかは、自ずと想像ができました。

選べないが、実は、自分で選んでいる

私達が、自分がどういふ親を持ち、そしてまたどういふ子供を持つつかという事は、先程も言いましたが、いわば神様任せで自分の力の及ばない話です。



しかしそういうふうにして与えられた親、或いは与えられた子供と自分が、どういふ親子関係を築くかという事は、それは神様任せでなく、自分達の力で変えていく事が出来る筈です。

そしてまた与えられた自分の親や子を、好きになるかどうかという事も、・・・この好き嫌いという事については、人間は感情の動物であると言われております様に、親子といえども、やはり相性という事があり、どうしてもないという面もありますが、それでも自分に与えられた親、あるいは子供とどう向き合い、どういふ関係を築いていくかという事は、感情だけでなく私達は理性を働かせる事もできるのであり、これも自分の問題なのです。

数限りなくある人の中で、よりによって自分達が親子関係になるという事は、全くの偶然のように見えますが、決してそれは偶然ではありません。

自分と相手との間には、元々何らかの意識を超えた深い絶対的な交流やつながりがあり、そこにまた絶対的な自然の摂理の働きがあったからこそ、こういう親子というような特別な関係になって生きる事になったのです。原因のない所には、決して結果は生まれません。また必要のないことは、起こってきません。

ですから自分達が親子として生まれてくるという事は、人為を越えた絶対の法則がそこに働いた結果であり、親子として生きる何らかの必然性がそこにあったという事です。

気に入った親であろうが、或いは気に入らない親であろうが、尊敬できる素晴らしい親であろうが、殺してしまいたいほど憎い親であろうが、絶対の自然の摂理からみれば、私達は親子になるべくして、相手と親子関係になったという事です。

互いに内在する夫々の因子にとって、相手は親となり子となる為の最適・最高の因子をもっており、互いの因子が引き寄せあったという事です。

因子というのは、自分の肉体や心のあり方、運命や宿命などを構成する要素であり、過去からずっと引き継いで持ってきた自分独自のものです。

また生みの親だけでなく、育ての親を持つという場合もあります  
が、いずれにしても互いが親子関係になるという事に、偶然という  
事は絶対になく、全ては必然の結果です。

その人が、今の自分に一番ふさわしい人

誰でも、自分の持つ魂の波動に一番ふさわしい人が、親として、  
或いは子として与えられるという事です。与えられるというか、親  
子の波動が互いを引き寄せ合うのです。

親と子は、表面に出ている面は色々違って見える場合もあります  
が、互いの内面に持っている物は、非常に似ている筈です。

本人同士は気付かない場合も多い様ですが、外から見れば親子は  
そっくりであり、子は親の鏡であり、また親は子の鏡でもあると言  
われるゆえんです。子供を見れば、その親の事はある程度分かしま  
すし、また親を見ればその子供の事も自ずと分かるものです。



精神的・霊的に高い波動を持つ親には、やはりそれにふさわしい  
高くて細かな波動を持つ子供が与えられます。

生まれてすぐに病気や事故で死んでしまう様な子供がいますが、  
このような子供を与えられる親というのは、総じて高い波動を持つ  
人が多いようである。

この世でしなければならぬ人間としての修行はあと少しだけで  
よく、次はもっと高次元の世界に生まれる事が約束されている様な、  
いわば天使の様な澄んだ波動の子供を授かる親というのは、やはり  
天使のような清らかな心の持ち主が多い様です。

これとは逆に、弱肉強食を地で行くような畜生的レベルで、荒々  
しく濁った波動の持ち主は、またそういう自分の波動に一番近い波  
動の子供を引き寄せ、自分の子として授かる事が多いのです。泥棒  
をする親には、やはりその親にふさわしい子供が与えられ、育てて  
くれた親の恩など忘れて、自分の事しか考えない、そういう不出来  
な子を持つ親というのも、厳しい言い方になりますが、やはりそう

いう子を持つ何らかの原因・因子が、親自身の中に必ずあるという  
事です。

この世だけではない、魂同士の深い繋がり

親子関係というのは、あらゆる人間関係の中でも、その基本とな  
るものです。私達は人間同士として互いに接し合う中で様々な事を  
学びあい、磨きあいをしているのですが、気に入らない相手の姿を  
見て、大体の人は相手を批判非難することが多いと思います。

しかし相手と違って見ているのは、実はそれは自分の中に内在す  
るもう一人の自分の姿なのです。自分の中にそういう因子がなけれ  
ば、決してその事を外に見る事はありません。ですから相手を指し  
てする批判、非難を、自分自身に向け、明るく反省し明るく訂正す  
る人は、必ず自分自身が向上できるのです。



そしてまたあらゆる人間関係の中で、特に親子の関係というのは、  
良い意味でも悪い意味でも非常に濃厚です。

大体の場合、親は自分の良い面も悪い面も全てをさらけ出しなが  
ら、自分の子供に接するはずです。

ですから親である前に一人の人間としての全人格が、子供の前に  
さらされ、子育ての中に現れ出るわけです。

一方、生まれたばかりの子供は、自分の命の全てを親にゆだね、  
絶対の信頼を寄せて子育てという仕事を託するわけです。

そういう魂レベルの深い結ばれ合いの中で、親は子を育てながら、  
自分の事よりも相手の事を優先するその大切さを学び、そして子は  
親に育ててもらいながら、人間として何よりも大切なこと、すなわ  
ち「感謝をする」という事を学んでいくのです。

この様な親子となる程の深い関係を結ぶ魂同士というのは、単に  
この世だけの関係だけではないようです。その関係は次の世まで続  
いて行き、時には必要に応じ、親子が入れ替わる事があるという様  
な話も聞いた事もあります。



互いの立場を入れ替え、した事をされ、された事をしながら、また別の角度で互いを育てあうわけです。

「他生の縁」という言葉があるように、一旦この世で縁を持った者同士は、「死んでしまえば、縁が切れる」という様なものではないのです。

特に大切な人とはいつかまた必ず会えるし、関係を修復する必要があれば、そのための場が必ずいつか与えられる筈です。

ですから私達はそういう事を心の隅において、互いを尊重し、いたわりあい、相手の中に自分を見ながら、生きていく今のうちに、心して良い関係を築くように努力しなければならぬと思います。

### 親子は、もともと不完全な人間同士

しかしどれ程良い親、良い子供になろうと努力もし、頑張っても、人間は完全無欠な神様にはなれません。

不完全な人間同士であれば、そしてそれが特に近い関係になればある程、軋轢（あつれき）は生じるものです。

それを、相手も自分も不完全な人間同士である事を忘れ、人間である親に完全を求め、あるいは人間である子供に完全を求める人がいますが、それは間違いです。

また親の行動を見て親を嫌い、否定する人がいますが、親を否定するという事は、結局は親と似たモノをもっている自分自身を、自分で否定しているという事に他なりません。

それは、自分の無意識では分かっておりながら、あえて意識的には絶対に認めたくない自分の内面の弱さや汚さなどを、親の姿を通して見せられるから、無意識の自分がそれに反撥し、拒否し、親を否定しているのです。誰かを嫌い、否定するというこの事は、単に親子関係の中だけではなく、あらゆる人間関係の中にこの原理を見ることが出来ます。

親の中にある素晴らしさと同時に、親の中にある人間としての弱さも認め、親を一人の人として尊敬し愛する事のできる人は、親を越えていける人であり、結局は自分自身の事を大切に出来る人でも



あるのです。そして自分の親だけでなく、他人の事をも温かい心で接する事ができる本当の大人でもあるのです。ひと言で言えば、幸せな人です。

世の中には色々な親がいますが、自分がどんな親に育てられるかという事は、大した問題ではありません。

親というのは、それは深い無意識の自分が、自分にとって一番ふさわしい人として自分で選んだのであるという事を、先ずは、丸ごと素直に、そして無条件に受け入れることです。

そして親の姿を通して自分を客観的に見つめ、誇りに思うべきところは誇りとして、親から受け継いだ良い面を伸ばし、また否定するべき所が見つかれば、そういう面が自分にもあるという事を素直に受け入れ、それに気付かせてくれた親に感謝をし、自分を訂正し、親を愛し、自分を愛する事です。

相手の行動が是であれ非であれ、自分の修行の糧となってくれる一番身近な人とは、自分にとって誰よりも一番近くににいる親であり、また子なのです。

相手が鬼であろうが仏であろうが、全ては恩人です。鬼の中に仏を見つけ出せるかどうかは、自分の力量次第です。

要は、親子関係であろうが何であろうが、人生すべて「煎じ詰めれば、みな自分」（平井謙次）という事です。

自分の内面の成長に伴って、目の前に現れる仏の姿は増える筈です。

### 【ご案内】

三月の勉強会は、三月五日（土）午後七時からです。

次回は、四月二日（土）午後七時からを予定しております。皆様のご参加を、お待ちしております。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)